

「ゆきもよに、」

—初稿—

2025/7/27

雨森 れに

〈人物表〉

石井 紘子

(72)

関節リウマチを患っている

吉田 みずえ

(50)

紘子の娘

森 洋子

(享年90)

紘子の母親

※ゆきもよに……古語。

「雪の降る中に」での意。

1. 森家・外観（夕）

田舎の一軒家。車が一台停まっている。
強く吹雪いているが、長い時間雪かきをしていない様子。車のわだちも消えている。

2. 森家・洋子の部屋（夕）

こぢんまりとした和室。床には遺品整理のために物が散乱している。石油ストーブがあり、ヤカンから湯気があがっている。

箆の前にいる石井絃子（72）。衣類をゴミ袋に詰めている。

廊下から吉田みずえ（50）が顔を出す。

みずえ「あ、スーツあったら取っというてよ」

絃子「もっと早く言ってよ。自分で探さないよ」

みずえ「じゃあいい」

みずえが去る。

絃子はゴミ袋の中でスーツを探す。指に痛みを感じ、手を出す。指はスワンネック変形している。

指を摩りながら、窓の外を見る。

日が落ち、薄暗くなっている。

絃子が障子を閉めようと掃き出し窓に近づく。

ガラスの結露に気づき、息をのむ。

下のほうに、いくつかの手形が浮き上がっている。

みずえ「（腕時計を見せながら）時計出てきたんだけど、お父さんに持ってく？ って何してんの」

絃子は窓辺でへたりこんでいる。

絃子「これ……（手形を指さす）」

みずえ「うわ……あ、ねえ。これおばあちゃんじゃないの」

絃子「迎えに来てるとか？」

みずえ「違う違う。ほら、ここに布団敷いてたから。窓開けたりしたんじゃないのって」

絃子「そうなの？ 前は壁側に敷いてたと思ったんだけど……」
みずえがため息をつく。

みずえ「そんなに会ってなかったわけ？」

絃子 「……会いたくなかったからね」

みずえ 「まあ、ちよっと過干渉だったよね。よくお母さんのこと聞きたがってたよ」

絃子 「そう。あなたにばっか、ごめんなさいね」

みずえ 「いいって。代わりに遺産多めに貰ったし。おかげで子供の学費は心配ない」

みずえは明るく笑う。

しかし、絃子は浮かない表情で、

絃子 「芳夫さんにも寂しい思いさせちゃったよね」

みずえ 「うちのは大丈夫。子供らとご飯作ったりしたらしいよ」

絃子 「いい旦那さんじゃない」

みずえ 「お父さんだって、いい旦那でしょ？ 昔からお母さんフアーストだったし。私はそっちのが寂しかったよ？」

絃子が目を見開く。だが、みずえと見つめ合うのが耐えられない。

窓に視線を移す。結露に浮かぶ手形を見てしまう。

みずえ 「ごめん。いじわるだったかも」

みずえが腕時計を絃子に渡す。

みずえ 「お父さんに、ね。芳夫の分もなんか貰うわ」

絃子 「お父さん、明日来るから。その時見てもらうね」

みずえ 「え？ 来るの？ ここ嫌いって言ってたのに」

絃子 「おばあちゃんがないからね」

みずえ、合点がいったという様子。

みずえ 「じゃ、もっとお宝探しておこうかな」

みずえが肩をまわしながら出ていく。

絃子は窓の障子をそっと閉める。

部屋に向き直り、散乱している物を眺める。

古い画用紙に目が留まる。

そこには「森絃子・森洋子」と名前が記されており、赤ん坊の手形と大人の手形が並んでいる。

3.

森家・客間（夜）

絃子とみずえが、布団を並べ寝ている。

絃子が目を開ける。起き上がり、隣のみずえを見る。

みずえは寝息を立てている。
絃子はみずえの布団をかけなおす。
そっと立ち上がり、客間を出る。

4. 森家・洋子の部屋（夜）

絃子が部屋に入ってくる。

照明はつけない。廊下の灯りだけが差しこむ。
障子を開け、床に寝転がる。

ガラスには何もない。

絃子が息をふきかける。ガラスにうつすら手形が現れ、消える。

また、息をふきかける。

現れた手形の横に自分の手をかざす。

今度は長めに息をふきかける。

絃子の手と同じく、歪んだ手形がはつきりと浮かぶ。

その横に自分の手形を押す。

絃子が鼻をすする。

体を起こし、何度か鼻をすする。

照明がつく。

半纏を着たみずえが現れる。

みずえ「どこいったかと思った」

絃子「（顔を隠して）なんでもないったら」

みずえ「葬式でも泣かなかったくせに」

絃子「もう行ってよ」

みずえは着ていた半纏を絃子にかける。

そして、石油ストーブのスイッチを入れる。

絃子「ちょっと」

みずえ「ごゆっくり」

絃子「……悪かったね」

みずえ「いいってば。家族でしょ」

みずえが部屋から出ていく。襖が閉められる。

絃子は半纏に袖を通す。

宙を見つめ、軽く息を吐く。目元に涙が滲んでいる。
指で涙をぬぐおうとする。

が、襖が開き、ティッシュ箱が飛んでくる。

みずえ「必要でしょ。じゃ、おやすみ（襖を閉める）」

絃子は、ティッシュ箱を見て、笑いだす。

ティッシュを一枚取り、目元を押さえる。

窓を見る。

窓の外は暗く、部屋の様子が映っている。

絃子は窓と向かいあうように座りなおす。

× × ×

変わらず障子を開けたままの窓。

空が白み始めている。

絃子は昼間見つけた画用紙を抱きしめている。

ガラスの結露は、手形を浮かび上がらせている。

絃子は、自分と洋子の手形が並んだ部分に指を置く。

指の痛みと戦いながら、「森絃子・森洋子」と書く。

絃子が立ち上がる。

5.

森家・客間（朝）

絃子が入ってくる。

みずえは布団の中でスマホを触っている。

みずえ「ストーブ、消した？」

絃子「もう。年寄り扱いして」

みずえ「だって。遺品整理で火事なんて、ねえ？」

絃子が半纏を脱ぎ、みずえにかける。

半纏越しにみずえをポンポンと叩く。

絃子「そうかもね」

みずえ「ちょっと、やめてよ。もう五十のオバチャンなのに」

絃子「アンタだって年寄り扱いしたじゃない」

みずえ「私より年上なことは変わらないでしょ」

絃子「そうだけどね」

絃子が自分の指を摩る。

みずえがそれに気づいて、上体を起こす。

みずえ「痛い？ 薬は？」

絃子「できるだけ飲まないでるの。摩ればマシになるし」

みずえ「だから、そういうことやっちゃダメなんだって。決めら

れたように薬のみな」

みずえの両手が絃子の指を包んで摩る。

みずえ「で、薬はどこ？」

絃子「あとで。もうちょっと摩ってて」

絃子はみずえの手を見つめている。

絃子「あんなに小さいおてでだったのにねえ」

みずえ「いつの話してんの」

絃子「アンタはリウマチ、気をつけなさいよ」

みずえ「もう。ボケはじめてんの？」

絃子は答えない。

みずえ「お母さん？」

絃子「あの、ね」

みずえ「うん」

絃子「ごめんなさい、ね」

絃子がみずえの手を握る。

みずえ「……別にいいよ」

みずえもそれに応える。

おわり